

静岡県水産試験場富士養鱒場 〒418-0108 富士宮市猪之頭 579-2

TEL: (0544)52-0311 FAX: (0544)52-0312

E-mail: suishi-masu@pref.shizuoka.lg.jp URL: <http://www6.shizuokanet.ne.jp/fujimasu/>

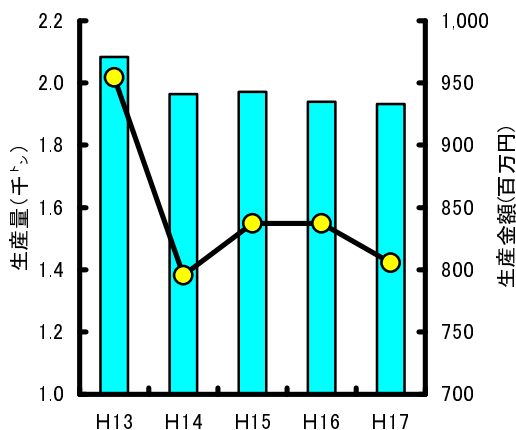
## 平成 17 年のサケ科魚類の生産と魚病被害の状況

平成 17 年の静岡県におけるサケ科魚類の生産と魚病被害の状況についてお知らせします。調査は県内のサケ科魚類養殖経営体 54 軒にアンケート票を配布し、これを回収・集計することによって行いました。取りまとめは、県内で養殖されている主要 4 魚種(ニジマス、ギンザケ、アマゴ、イワナ)について行いましたが、アマゴ以外の魚種は回収率 100%となりました。

### 1 ニジマス

#### (1)生産量

静岡県における養殖ニジマスの生産状況の推移を第 1 図に示しました。



第 1 図 静岡県における養殖ニジマス生産状況  
(生産量: 棒 生産金額: 折れ線)

平成 17 年の生産量は 1,932 トンで、生産金額は 8 億 569 万円でした。生産量は 14 年から 4 年続けて 2,000 トンを下回り、過去 5 年間で

最も少なくなりました。生産金額は 16 年と比べ 4,222 万円減少し、過去 5 年間では 14 年の 7,955 万円に次いで 2 番目に少なくなりました。なお、生産金額を生産量で割った生産単価をみると、17 年は 417 円/kg となりました。13~17 年の 5 年間(以下、5 年間とは 13~17 年を指すこととします)では、14 年に 458 円/kg となった以外は 400 円/kg 台前半となっていました。

#### (2)魚病被害状況

平成 17 年の静岡県における養殖マス類の魚病被害状況を魚病別に第 1 表に示しました。

17 年のニジマスの魚病被害量は 219 トン、被害金額は 1 億 2,301 万円であり、生産量の 11.3%、生産金額の 15.3%に相当しました。

これを疾病別にみると、最も被害量が多かったのはレンサ球菌症\*であり、89.0 トンの被害量でした。レンサ球菌症は富士宮市内や伊豆地域の一部の養魚場で大きな被害を与えましたが、レンサ球菌症の被害量が大きくなる原因は、発病サイズが数 10g からキロサイズまでと比較的大型であるためといえます。レンサ球菌症に次いで被害量が大きかったのはビブリオ病で 27.2 トンでした。その他では不明を除いて

\* これまでは「連鎖球菌症」としてきましたが、日本魚病学会では「レンサ球菌症」とカタカナで表記しているため、今後は「レンサ球菌症」と表記します。

第1表 静岡県における養殖マス類の魚病被害状況(平成17年)

上段:被害量 kg、下段:被害金額 千円

	ニジマス	ギンザケ	アマゴ	イワナ	合計
IHN	23,750				23,750
	33,300				33,300
OMVD (ヘルペスウイルス病)					0
					0
EIBS (赤血球封入体症候群)		5,500			5,500
		7,000			7,000
ビブリオ病	27,200				27,200
	14,810				14,810
せっそう病				6,000	6,000
				5,700	5,700
冷水病	4,400		250	1,000	5,650
	5,500		500	600	6,600
レンサ球菌症	89,000				89,000
	36,400				36,400
細菌性鰓病	11,450		5	3,000	14,455
	7,100		10	2,400	9,510
白点病	1,000		115		1,115
	1,000		453		1,453
イクチオホヌス症	23,000	300			23,300
	9,000	120			9,120
ミズカビ病	12,000	200			12,200
	4,300	120			4,420
不明	27,500		250	1,000	28,750
	11,600		540	1,500	13,640
合計	219,300	6,000	620	11,000	236,920
	123,010	7,240	1,503	10,200	141,953

10トン以上の被害がみられたのはIHN、細菌性鰓病、イクチオホヌス症、ミズカビ病で、被害量はそれぞれ23.8、11.5、23.0、12.0トンでした。

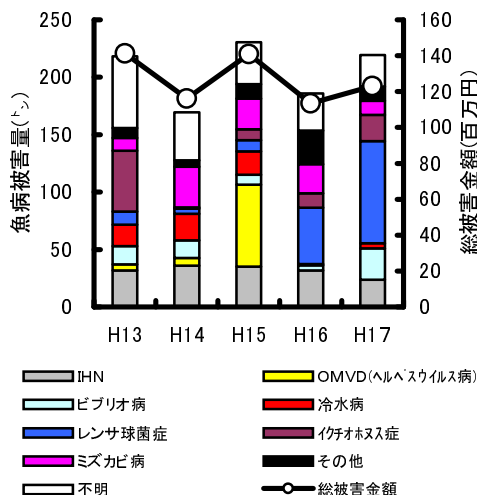
ニジマスの魚病被害状況を被害金額で見ると、最も被害金額が大きかったのもレンサ球菌症で、3,640万円でした。その他ではIHNとビブリオ病が被害金額1,000万円以上の被害となり、被害金額はそれぞれ3,330、1,481万円でした。

静岡県における養殖ニジマスの魚病被害の推移を第2図に示しました。

5年間のニジマス魚病被害量は169～231トンであり、平成17年は15年に次いで2番目に被害量が大きくなっていました。疾病別被害

量の推移をみると、IHNは13～16年には30トン以上の被害量でしたが、17年には23.8トンに減少しました。また、15年に71.4トンの被害量となったヘルペスウイルス病は16年に続いて17年も被害はありませんでした。一方、13～15年には被害量が4.5～11.5トンであったレンサ球菌症は、16年には49.2トンに急増し、17年にはさらに89.0トンにまで増加しました。また、13～16年は4.6～15.9トンであったビブリオ病と14年には1.0トンにまで減少したイクチオホヌス症もそれぞれ増加傾向を示していました。

被害金額の推移をみると、5年間では1億1,343万～1億4,121万円の範囲にあり、平均すると1億2,696万円となりました。17年の被



第2図 静岡県における養殖ニジマスの魚病被害の推移  
(被害量:棒、被害金額:折れ線)

害金額は1億2,301万円でしたから、17年の被害金額は5年間では平均的な値であったといえます。

このように17年の集計結果からみると、ニジマスではレンサ球菌症とビブリオ病が特に注意を要する疾病ではないかと思われます。レンサ球菌症には現在承認された水産用医薬品はなく、サケ科魚類レンサ球菌症用のワクチンも存在しないので、早急に予防・治療対策を確立する必要があります。当方も全国養鱒技術協議会の会員としてレンサ球菌症に対する水産用医薬品の効能拡大

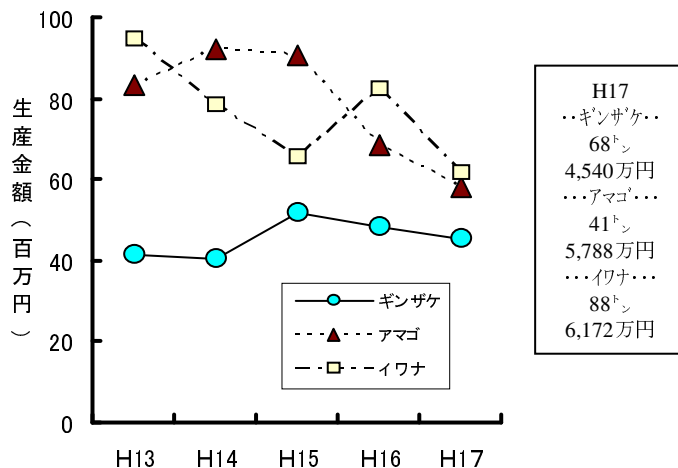
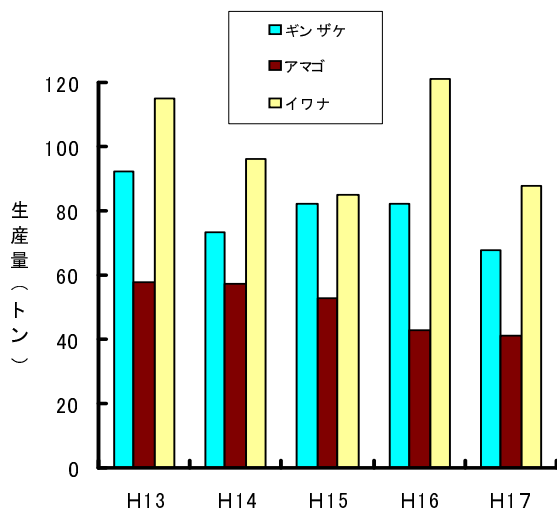
に関する試験等に参画し、レンサ球菌症対策確立に努めているところです。一方、ビブリオ病には承認された抗菌剤や不活化ワクチンが市販されているので、本来はこれらを適切に利用していくことにより、被害を抑制できるものと思われます。ニジマスの販売価格が低迷する中でワクチンにかかるコスト負担も小さくないとは思いますが、ワクチンの予防効果は明らかです。したがって、ワクチンを使用せず、かつビブリオ病の被害に悩まされているのであれば、ワクチンの利用を考えて頂きたいと思います。

## 2 ギンザケ、アマゴ、イワナ

### (1)生産状況

静岡県におけるニジマス以外の養殖マス類の生産状況を第3図に示しました。

平成17年の生産量はギンザケ、アマゴ、イワナそれぞれ68、41、88トンで、生産金額は4,540万、5,788万、6,172万円でした。5年間の生産状況の推移をみると、ギンザケの13年の生産量は92トンでしたが、14～16年には73～82トンとなり、17年には5年間で最も少ない生産量となりました。生産金額は15年に5,168万円と過去5年間では最大となりましたが、それ以外の年は4,000万円台で推移し、大きな変化はありませんでした。アマゴの生産量は



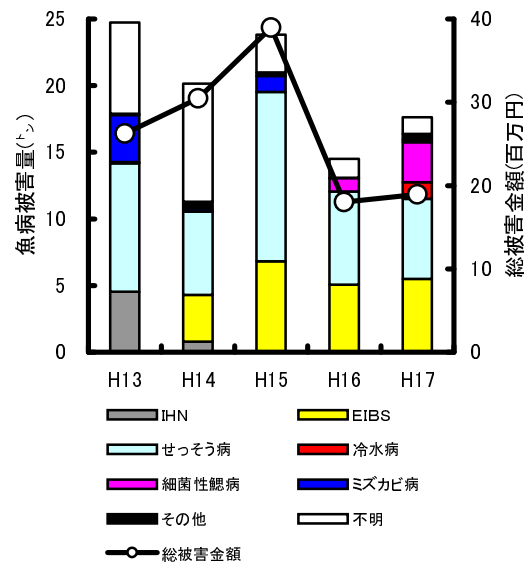
第3図 静岡県におけるニジマス以外の養殖マス類の生産状況

13～15年には50トン台でしたが、16、17年は40トン台になりました。生産金額は13～15年には8,338～9,197万円でしたが、16、17年は6,825万、5,788万円となり、16年を境にアマゴの生産の落ち込みが目立ちました。イワナの生産量は年変動が大きく、13、16年は100トンを超えていましたが、その他の年は85～96トンでした。生産金額は生産量にほぼ比例していましたが、17年は生産量では5年間で2番目に少なくなっていました、生産金額では5年間で最も小さくなっていました。一方、ニジマスと同様にそれぞれの魚種の生産単価を求めると、17年にはギンザケ、アマゴ、イワナの順に668、1,412、701円/kgとなりました。ギンザケは5年間では最も高くなりましたが、アマゴは最も低くなりました。イワナは5年間では2番目に低い値でしたが、最も低かった16年と比べると20円/kg高くなっていました。

(2)魚病被害状況

第1表に示したとおり、平成17年におけるニジマス以外の養殖マス類の魚病被害量は17.6トンでした。その内訳は、せつそう病、EIBS、その他の疾病の合計それぞれで6.0、5.5、6.1トンとなり、これら3疾病がほぼ1/3ずつを占めていました。17年に特徴的であったのはアマゴでのせつそう病被害がなかったことです。そのため、アマゴの魚病被害量は0.6トンとなりましたが、これは13～16年のアマゴの魚病被害量3.3～5.9トン(平均4.7トン)と比べ、被害としては非常に小さいものといえます。

静岡県におけるニジマス以外の養殖マス類の魚病被害状況を第4図に示しました。



第4図 静岡県におけるニジマスを除く養殖マス類の魚病被害状況 (被害量: 棒、被害金額: 折れ線)

ニジマス以外の魚種でのIHN被害は平成15年以降ほぼ無くなっていました(15年は30kgの被害があり、16、17年はゼロでした)。一方、EIBSの13年の被害はゼロでしたが、14～17年は3.5～6.8トンの被害となりました。せつそう病の被害は15年に12.7トンと非常に大きく、13年も9.6トンと大きくなりましたが、14、16、17年は6.0～7.0トンとなりました。17年には細菌性鰓病の被害が大きく、13～16年には0.0～1.0トンでしたが、17年には3.0トンに増加していました。

被害金額の推移をみると、13～15年までは2,623～3,895万円であり、年々増加する傾向にありましたが、16、17年は1,803万、1,894万円と、13～15年と比べて低い値となりました。

(現 農業水産部企画調整室 青島秀治)

平成18年度人事異動

転出 主任 青島 秀治 → 農業水産部企画調整室主査  
 転入 副主任 岡田 裕史 ← 水産試験場利用普及部技師

## 講習会が開催されました



去る3月9日に、富士養鱒漁業協同組合会議室において講習会が開催されました。今年には昨年度に引き続き、北海道大学の吉水守先生より「サケ科魚類の病気対策について ～原点に戻って～」というテーマでご講演をいただきました。

当日は漁協組合員が多数出席するなか先生より、サケ科魚類の卵消毒や飼育施設入室時の消毒についての再確認、IHNワクチン開発の現状など、現場で役立つ話題から、魚病診断方法、IHNウィルスの日本への侵入経路お

よび系統樹など専門的なお話まで幅広い内容でご講演いただきました。生産者の方だけではなく私達水産試験場の職員にとっても非常に有意義なお話しでした。中でも、病気対策としてはやはり防疫体制をきちんと整備し、実行することが非常に重要だという話については、耳の痛い方もおられたかもしれません。

養殖業者の方々にとって魚病というのは非常に大きな問題だと思います。ただ残念ながら一旦病気が出てしまうと対処療法はほとんどないのが現状です。そういった意味からも、病気は出さない、持込まないのが非常に重要だと思います。是非一度それぞれの飼育施設の消毒について、再度点検をしていただければと思います。また、講習会の内容等についてご意見、ご感想等ありましたら、是非水産試験場までご連絡ください。お待ちしております。

(望月万美子)

## 転入職員紹介

はじめまして。焼津にあります水産試験場利用普及部加工水質研究室より転勤してまいりました岡田裕史と申します。前の所属では食品の安全性に関する研究をしておりました。

こちらでは「安全・安心な養殖魚の生産技術研究」を担当します。魚の飼育に関する研究に携わるのは、学生時代を通じて初めてになります。今のところはわからないことだらけですが、地道に勉強していきたいと思っています。よろしくお願ひします。



## 富士養鱒場の湧水と気象

月	降水量 (mm) カッコは降水日数		湧水量 (千トン/日)					
	18 年	20 年平均	18 年	20 年平均				
1 月	71 ( 9 )	78 ( 6 )	2.60	3.66				
2 月	198 ( 9 )	86 ( 6 )	2.14	3.07				
3 月	172 ( 9 )	199 ( 9 )	3.46	3.12				
月	平均気温 (°C)			天候 (午前9時、日数)				
	午前9時	最低	最高	快晴	晴れ	曇り	雨	霧
1 月	1.1	-2.6	4.9	3	10	15	1	2
2 月	3.0	-1.0	7.2	3	12	9	4	0
3 月	5.9	0.5	10.2	2	9	17	2	0

### 日 誌

<p>1 月 4 日 仕事始め (東京都)</p> <p>5 日 業務連絡会議・分場長会議(本場)</p> <p>11 日 本監査(本場)</p> <p>18 日 マーケティング検討会(富士養鱒漁協)</p> <p>19 日 富士地域機関長会議(富士市)</p> <p>24 日 漁業士認定式(静岡市)</p> <p>27 日 水産加工セミナー(本場)</p> <p>2 月 1 日 研報編集委員会(本場)</p> <p>3 日 業務連絡会議・分場長会議(本場)</p> <p>6 日 業者巡回(小山町)</p> <p>7 日 アユ試験研究打合せ(浜名湖分場)</p> <p>8 日 業者巡回(伊豆地域)</p> <p>9 日 地域ブランドセミナー(東京都)</p> <p>10 日 漁業士会総会(浜松市)</p> <p>15 日 業者巡回(伊豆地域)</p> <p>21 日 水産業普及指導員一般研修(本場)</p> <p>27 日 富士宮市立富士根南小学校見学 193 人 魚病対策委員会技術部会(県庁) 渓流域管理体制構築事業報告会</p>	<p>28 日 アユ資源研究部会 (~1、東京都)</p> <p>3 月 1 日 技術連絡協議会(浜名湖分場)</p> <p>2 日 富士宮市立黒田小学校見学 103 人</p> <p>3 日 業務連絡会議・分場長会議(本場) 富士宮市立大富士小学校見学 103 人</p> <p>6 日 東海大学秋山助教授来場</p> <p>7 日 水産専門部会(本場)</p> <p>8 日 統計実務研修(静岡市)</p> <p>9 日 普及事業講習会(富士養鱒漁協)</p> <p>10 日 全国養殖衛生管理推進会議(東京都)</p> <p>15 日 内漁連意見交換会(静岡市) 水産振興審議会(静岡市)</p> <p>16 日 生産業務検討会</p> <p>20 日 食の安全安心フォーラム(静岡市)</p> <p>22 日 魚病対策委員会・防疫対策会議(静岡市)</p> <p>30 日 ケニファインに関する試験研究打合せ (富士養鱒漁協)</p>
---	---